

令和 4 年 6 月 9 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00264

研究課題名(和文) 演劇と市民社会：佐藤信による劇場創造とアジア演劇との交流事業に関する調査

研究課題名(英文) Theatre and Civil Society: The Theatres Satoh Makoto Created and His Interactions with Asian Theatre

研究代表者

梅山 いつき (UMEYAMA, ITSUKI)

近畿大学・文芸学部・准教授

研究者番号：50505401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は演出家・劇作家佐藤信を取り上げ、彼が創設に携わった数々の劇場と、アジアの近隣諸国との交流事業について調査研究するものである。当初、中国やフィリピンにおける活動について現地調査しようと計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により困難となった。その分、国内調査を重点的に行い、佐藤が運営している劇場の調査や、所蔵していた演劇関係資料を整理し、調査結果を単著『佐藤信と「運動」の演劇：黒テントとともに歩んだ50年』にまとめた。アジア演劇との交流を含む黒テントでの活動が後の公共劇場の運営や現在の創作活動にどのように引き継がれているかを考察した。本書はAICT国際演劇評論家賞を受賞した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではこれまで大々的に調査されてこなかった佐藤信の活動について主に資料調査をもとに明らかにしようとする点でこれまでにない研究と言える。研究成果をまとめた単著『佐藤信と「運動」の演劇：黒テントとともに歩んだ50年』では幼少期から今日に至るまでに佐藤が手がけた作品をリスト化し、詳細な年譜も作成した。近年の活動も含め、佐藤の創作活動を論じた研究書は本書が初であり、黒テントについても、その活動はこれまで全容が明らかになってこなかった。そうした点で本研究及び本書の刊行は佐藤や黒テントの研究をさらに発展させる上で意義のあるものと言える。

研究成果の概要(英文)：This study discusses Japanese theatre director and playwright Satoh Makoto and investigates the many theatres he has been involved in creating and his interactions with various neighboring Asian countries. Initially, the author planned to conduct on-site investigations into Satoh's activities in China and the Philippines, but this became difficult with the spread of COVID-19. The author instead focused the investigation within Japan, explored the theatres that Satoh operates, organized the theatre-related materials in their collections, and summarized the investigation outcomes in the standalone work Satoh Makoto and Theatre as "Movement": 50 Years with the Black Tent. The study considers how the activities of the Black Tent theatre company, including interactions with theatre in neighboring Asian countries, have been passed down to later public theatres operations and Satoh's current creative activities. This book was awarded the AICT Prize.

研究分野：現代演劇

キーワード：現代演劇 日本演劇 劇場文化 演劇史 文化政策

1. 研究開始当初の背景

本研究は演出家・劇作家佐藤信を取り上げ、彼が創設に携わった数々の劇場と、アジアの近隣諸国との交流事業について調査研究するものである。

日本の現代演劇は1960年代半ばに台頭した小劇場演劇第一世代、またはアングラ演劇と呼ばれた新しい演劇の担い手たちによって大きな転換期を迎えた。本研究が考察対象としている佐藤信もその代表的な演劇人の一人であり、他には唐十郎、清水邦夫、鈴木忠志、寺山修司、蜷川幸雄、別役実らをあげられる。

小劇場運動の功績の一つに、その総称にもある「小劇場」という新たな表現の場を切り開いたことをあげられる。佐藤たち小劇場演劇第一世代の特筆すべき特徴として、60年代に自費を投じた私設の劇場を構えながら、その後、その拠点にとどまらずに各地に活動範囲を広げたことと、90年代に入り相次いで建設された公共劇場の運営において重要な役割を果たしたことをあげられる。現在、彼らが手がけた劇場は舞台芸術の創造において非常に重要な役割を担っている。中でも佐藤はその半世紀にわたる作家活動において、民間・公共問わず数多くの劇場の創設と運営に携わってきた。

さらに佐藤は戦後、緊張関係にあったアジア諸国と共同制作などの交流を積極的に行ってきた。演劇を介して加害国と被害国の対話の場をつくり、約40年間に渡って積み重ね、中国、フィリピン、シンガポール等の演劇人との間にネットワークを築いたことの功績は大きい。しかしながら、一連の佐藤の活動が論証されることは少ないのが現状である。活動が多岐におよぶことや、劇場運営や表現者間のネットワーク構築などの創作環境の整備は、作品の上演活動に比べて、外側から看取しにくいことが要因として考えられる。さらに、佐藤だけでなく小劇場演劇第一世代全体についても学術研究の場で検証されることは未だに少ない状況にある。研究対象が近過去であり、創作活動を継続している者もいることから、活動を対象化しにくい状況にあるためであるが、一方で、近年では関係者が相次いで鬼籍に入っていることから、調査研究は急務である。

2. 研究の目的

本研究は佐藤信の約半世紀におよぶ活動について、主に劇場に関わる活動とアジアとの交流事業を調査研究し、市民社会における演劇の役割を問う。まず、劇場に関わる活動についてだが、佐藤の本格的な演劇活動は1966年にアンダーグラウンド・シアター自由劇場を構えたことに始まる。本研究では、この小さな民間劇場から公共劇場に至るまでの活動の変遷を辿る。佐藤が公有地と演劇、市民との関係を考える大きな契機となったのは、『阿部定の犬』(作・演出佐藤信、1972年)の沖縄公演である。会場予定だった公園の使用が公演日の直前に不許可になったことを巡って佐藤たちは裁判を起こす。この経験もあって、佐藤たちは意識的に公有地を使用してテント公演を行うことで、行政との対立の度に日本社会が表現活動のための場を提供することにいかに消極的かを痛感しながらも、真の意味で市民に開かれた場を切り開こうと奮闘した。そうした経験は後の公共劇場の構想に大きな影響を与えたが、興味深いことは、佐藤が公共劇場の事業に携わりながら、同時に民間の劇場も運営し、両方を活動拠点にしていることである。現在も杉並区の公共劇場である座・高円寺の芸術監督をつとめながら、横浜に若葉町ウォーフという私設の劇場を構え、両劇場で創作と若手の育成を行っている。なぜ佐藤はこのようなスタイルを続けているのか？また、公共と民間、両方の劇場の設立と運営に携わることで、佐藤はいかにして劇場文化を日本社会に根付かせようとしてきたのだろうか？以上を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は三年間に渡って行われる。まず、佐藤の活動を以下の略年譜の通り大きく6期に分け、劇場に関する活動とアジアとの交流事業が中心になる、3・4期および6期について重点的に調査する。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が所蔵している佐藤の旧蔵資料や関係者からの聞き取り、佐藤が主催しているワークショップや公演の視察等の調査から、活動実態を明らかにし、研究成果は書籍としてまとめ、広く社会に向けて発表したい。各期は下表の「主要な活動」の欄に記した活動に焦点を当てて調査を進めたい。

< 佐藤信の活動略年譜 >

	時期	活動テーマ	主要な活動
1期	1966 ~ 1969	自由劇場と小劇場運動	・アンダーグラウンド・シアター自由劇場開場 ・演劇センター68 / 71 立ち上げ

2 期	1970 ～ 1979	黒色テントと公有地問 題	・黒色テント全国公演・沖縄公演を巡る裁判
3 期	1980 ～ 1989	アジアの民衆劇	・フィリピン PETA との交流 ・Asian Contemporary Arts Workshop 開催 ・日中合作オペラ『魔笛』北京公演
4 期	1990 ～ 1999	演劇の公共性	・世田谷パブリックシアター芸術監督就任
5 期	2000 ～ 2009	演劇と教育	・東京学芸大学教授就任・座・高円寺アカデミー
6 期	2010 ～ 現 在	少数者のための演劇	・横浜・若葉町ウオーフ開場 ・アジア若手演劇人ワークショップ開始 ・地方公共劇場アドバイザー

初年度は佐藤が所蔵していた演劇関係の資料を整理する。二年目、三年目には中国やフィリピンにおける佐藤と黒テントの活動について現地調査しようと計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により困難となった。そこで、その分、国内調査を重点的にを行い、佐藤が運営している劇場の調査や、影響を受けた後継世代の活動について調査することにした。

4. 研究成果

初年度にあたる 2019 年は佐藤が所蔵していた演劇関係の資料を整理し、早稲田大学演劇博物館へ寄贈した。資料調査等の研究成果は単著『佐藤信と「運動」の演劇 黒テントとともに歩んだ 50 年』（作品社）にまとめた（近畿大学・研究成果刊行助成による出版）。本書は、佐藤信の活動について、中心的な役割を担ってきた劇団黒テントにおける活動を主に取り上げて論じたものである。本書の執筆を通して、佐藤と黒テントの活動とは、演劇という分野を超えた社会運動でもあったことが明らかになった。佐藤たちは活動当初より、テントによる野外公演を上演することで劇場の外へと演劇を持ち出し、演劇を市民のより身近なものへと変えようと試みてきた。中でも、1970 年代後半から 80 年代にかけて展開された、「赤いキャバレー」というシリーズは教育機関や労働現場に作品を持ち込み、観客と共に作品をめぐる議論しようとする、他の劇団には見られないユニークな取り組みだったが、その実態についてはこれまで多く語れないままであった。本書では、そうした佐藤と黒テントの独自の取り組みについて、関係者からの聞き取りや資料考証から明らかにした。また、本書では近年、佐藤が公共劇場で取り組んでいる、演劇文化を市民社会により開いたものにしようとする試みや、アジアの近隣諸国の若手アーティストとの共同制作についても取り上げた。さらに、幼少期から今日に至るまでに佐藤が手がけた作品をリスト化し、詳細な年譜も作成した。近年の活動も含め、佐藤の創作活動を論じた研究書は本書が初である。また、黒テントについても、その活動はこれまで全容が明らかになってこなかった。そうした点で、本書の刊行は、今後、佐藤や黒テントの研究をさらに発展させる上で意義のあるものと言えるだろう。

2020 年度は当初、佐藤信と黒テントの中国やフィリピンにおける活動を現地調査しようと計画していたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、海外出張ができず、計画を国内調査に変更した。国内調査についても上半期は関係機関の訪問が難しかったため、感染状況が落ち着いた 10 月以降に行うこととなった。10 月から 2021 年 3 月にかけて、佐藤が運営に携わっている 2 つの劇場、座・高円寺(東京)と若葉町ウオーフ(横浜)を訪問し、佐藤の演出作品『男たちの中で』『ジョルジュ』『パール・ギュント』等を視察し、両劇場の運営と合わせて調査することができた。また、数年前より佐藤が所蔵していた演劇関係資料の整理がほぼ完了したため、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に寄贈した。本年はその引き渡しに関わる作業を演劇博物館で行った。演劇博物館では佐藤と同時期に演劇活動を開始し、影響関係にあった劇作家・別役実に関する資料調査も行った(早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点・テーマ研究「別役実草稿研究」、研究代表者:梅山いつき、文部科学省)。研究成果の一部を演劇博物館で 2021 年 5 月に開催予定の特別展示で公開する予定である。佐藤と別役については、両者が手がけたテレビやラジオの放送作品についても調査しており、今後、研究成果を論文等で発表する予定である。なお、2020 年 3 月に、それまでの資料調査等の研究成果をまとめた単著『佐藤信と「運動」の演劇 黒テントとともに歩んだ 50 年』（作品社）を刊行した。本書は 本研究が研究対象にしている佐藤信の活動について、中心的な役割を担ってきた劇団黒テントにおける活動を主に取り上げて論じたものである。その内容が評価され、第 26 回 AICT 演劇評論賞を受賞するはこびとなった。

最終年度にあたる 2021 年は当初、佐藤と黒テントの中国やフィリピンにおける活動を現地調査しようとしていたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、海外出張ができず、計画を国内調査に変更した。国内調査では佐藤の公演だけでなく、佐藤と交流のある若手劇団の公演の調査も行った。佐藤の初期作品に携わった串田和美と佐藤の対談でモデレーターをつとめ、1960年代の創作や公共劇場で手がけた事業について話を伺うことができた(劇場セミナー:次世代モデルの研究:第6回「都市と演劇 ふたりの演劇人の半世紀」)。資料調査の拠点である演劇博物館では、佐藤と同世代の劇作家・別役実に関する調査研究を進めた。佐藤の作家活動について考察する上で手がかりとなりうる情報を、特に放送作品に関する調査から得られた。その成果を表象文化論学会第15回大会で、パネル発表「新出資料から見る別役実の世界」(岡室美奈子、梅山いつき、後藤隆基)で発表し、展示図録『別役実のつくりかた 幻の処女戯曲 からそよそよ族へ』(演劇博物館)や、単行本『別役実の風景』(論創社)に論文を寄稿した。また、本年は最終年度ということで、これ以外にも日本近代文学 会 2021 年度秋季大会でのシンポジウム「雑踏の中の1960年代文学」や、韓国演劇学会などで研究成果を学会や論文の形で積極的に発信した。

三年間の調査によって、佐藤の活動の中でも黒テントと劇場に関する活動についての詳細を明らかにすることはできたが、アジアとの交流事業については十分な調査ができたとは言い難い。過去の資料を紐解くことで、黒テントとアジア演劇との交流について知ることはできたが、資料に限りがあったために詳細を知るまでには至らなかった。これについては今後も引き続き調査を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 梅山いつき	4. 巻 52
2. 論文標題 別役実と寺山修司の「街」と「飛行」をめぐる二作品	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 201-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅山いつき	4. 巻 69
2. 論文標題 都市空間における野外劇の役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 都市計画	6. 最初と最後の頁 24-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 梅山いつき, 岡室美奈子, 後藤隆基
2. 発表標題 パネル「新出資料から見る別役実の世界」
3. 学会等名 表象文化論学会第15回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅山いつき
2. 発表標題 コロナ時代における演劇資料活用の可能性 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館の取り組み
3. 学会等名 韓国演劇学会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梅山いつき
2. 発表標題 都市空間に放たれた言葉と身体 1960年代の小劇場運動と言語活動(シンポジウム「雑踏の中の1960年代文学」)
3. 学会等名 日本近代文学会2021年度秋季大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 梅山いつき	4. 発行年 2020年
2. 出版社 作品社	5. 総ページ数 356
3. 書名 佐藤信と「運動」の演劇：黒テントとともに歩んだ50年	

1. 著者名 岡室美奈子, 梅山いつき	4. 発行年 2021年
2. 出版社 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	5. 総ページ数 111
3. 書名 別役実のつくりかた 幻の処女戯曲からそよそよ族へ	

1. 著者名 野田映史, 梅山いつき, べつやくれい, 石澤秀二, 貝山武久, 喜志哲雄, 平田オリザ, 岩松了, 松本修, 小森美巳, 平井久美子, 鈴木忠志, 藤原新平, 角野卓造, スズキコージ, 小室等, 小笠原昌夫, 川上正沙子, 芹沢俊介, 喜多哲正, 是永海南男, 堀間善憲, 砂山幸彦, 梶原礼之, 有馬弘純, 岡室美奈子, 内田洋一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 論創社	5. 総ページ数 352
3. 書名 別役実の風景	

1. 著者名 後藤隆基, 梅山いつき, 中村邦生, 嶋田直哉, 松本和也, 日置貴之, 堀切克洋, 仲田恭子, 新野守広, 後藤絢子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 小劇場演劇とは何か (立教大学日文叢書 1)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------